
1 0 《ディケイド》 × 4 0 《オールライダー》 仮面ライダーの世界

作者 B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10《ディケイド》×40《オールライダー》 仮面ライダーの世界

【Nコード】

N6860Y

【作者名】

作者B

【あらすじ】

仮面ライダーをクロスさせるなら、ディケイドでよくね？という発想の元、「オーズ・電王・オールライダー レッツゴー仮面ライダー」の主人公にディケイドを加えてみました。基本原作通りの展開なので、目新しい展開はあまり期待しないで下さい。あと、映画を見てない人でも分かるように書いていくつもりです。

これが初投稿作品です。至らない点が多々あると思いますが、ご了承

承下さい。

プロローグ（前書き）

「仮面ライダーは、無敵だ！」

「正義 仮面ライダー2号」

「V3がいる限り、野望は遂げせん！」

「待ってくれ首領！貴方は人類を滅ぼすつもりか」

「見ていてくれ、オヤジ……」

「オレ、トモダチタスケル」

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ！」

「君も人生に命を懸けてくれ」

「人の夢の為に生まれた。この拳……この命はその為のものだ！」

「俺は……仮面ライダー10号」

「俺は改造人間、南光太郎！！」

「この世に光がある限り、俺は何度でも蘇る！！」

「行かなきゃ……誰かが俺に助けを求めてる……！」

「みんな一生懸命生きてるんだ。それを壊しちゃいけない」

「Jパワーの戦士」

「これ以上、誰かの涙を見たくない!」

「俺は戦う!アギトの為に、人間の為に!」

「誰かを助ける為だけに変身する」

「俺には夢は無い。でも、守ることは出来る」

「戦えない、大勢の人の為に……俺は戦う!」

「鍛えてますからっ」

「俺は既に未来を掴んでいる。そしてこれからも……掴み続ける」

「俺、参上!」

「皆を守ってみせる」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ!」

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「楽して助かる命がないのは、何処も同じだな」

『『『変身!』』』

ブローグ

「あゝ、こりゃ駄目だ。一度ばらして修理しないと」

そう呟いたのは、光写真館を営んでいる”光荣次郎”だ。

「ああ、直るんならそれでいい。修理の間、代わりになるカメラを貸してくれ」

返答したのは居候の”門矢士”。どうやら、彼のカメラが壊れてしまったらしい。

「別にいいけど……レンタル代も含めて、きちんと払ってくれないと困るからね」

「わかったわかった」

「じゃあ……はい、これ代わりのカメラ。僕は修理してくるから」

そう言つて、栄次郎は士にポラロイドカメラを渡し、奥の部屋へ入っていく。

「さて、暫くはこれで我慢するか」

「我慢するか、じゃないですよ！いい加減溜まった付けを払って下さい！」

士に怒鳴っているのは”光夏美”。栄次郎の孫で、この写真館で祖父と一緒に働いている。

「わかってるって」

「もう！土君のわかったは当てにならないんですから。はぁ、ユウスケも里帰りしちゃいましたし」

ユウスケとはこの写真館のもう一人の居候である。しかし、今回は登場しないので割愛する。

「お陰で口うるさいのが居ないから、最近は静かでいいな」

「もう！そんなこと言っては駄目ですよ！」

「その通りだぞ、家臣その6。私の世話をする者が一人減ってしまったのだからな」

「誰が家臣だ、誰が……ん？」

光写真館で暮らしているのは4人。では、今の声の正体は何なのか。ふと土が振り返ると

「降臨。満を辞して」

白い鳥が立っていた。

「貴方はジーク！？」

「おい、鳥！何でお前が居るんだ！」

二人は以前面識があるが、余り良い思い出がないため、とても嫌そ

うな顔をしている。

「家臣の為にこの私自ら出向いたのだ。茶の一つくらい出せんのか、家臣その6」

「お前なあゝッ！」

「落ち着いて下さい、土君！それで……土君の為って、どういつとですか？」

夏美が質問をすると、ジークは近くの椅子に腰かけ話し始めた。

「届け物だ。ほれ、これはお前の物だろう」

そう言つて、懐からあるものを取り出す。

「これは……土君のカード？」

それは、絵柄の描かれていないカードだった。

「そうみたいだな。おい！このカード、どこで拾ったんだ？」

「ん？そうだな、あれは確か……」

土の質問に対し、ジークは回想に入る。

「1〜6ヶ月前の晴れか曇りか雨の日だったなあ」

「……つまり覚えて無いんですね」

「使えない鳥だ」

これ以上の質問は無意味だと士は思い、渡されたカードを眺める。

「そのカード、これから何が起こるのでしょうか？」

「さあな。わかっているのは、また新しい旅が始まるってことだけだ」

そう言うと、士はカードをしまう。

「今日は栄次郎は居ないのか？また私の美しい姿を写真に収めて貰おうと思ったのだが……」

ジークはそう言いながら部屋を徘徊する。

「ああ、そんなに歩き回ると」

「ぬおっ！」

ジークの足が背景幕の紐に引っ掛かり、そのまま倒れる。
そして、背景絵が次の旅路を示すべく現れる。

「士君、これは……」

そこに映るのは、28人の戦士がズラリと並んだ姿だった。

「これは……」 仮面ライダーの世界」

今再び、士 仮面ライダーディケイド の新たな物語が始まる。

仮面ライダーの世界

「くそっ！あの鳥、後で覚えてろ！」

「でも、ここは一体何処なんでしょう？」

士と夏美は街の外れにあるアリーナの近くを歩いていた。
何故そんな所に居るかという、それは数分前に遡る。

『おい、家臣その6。さっさと茶を用意しろ』

『誰がやるかつ！』

『士君落ち着いて下さ え？地震！？』

『何だ！？この揺れは何事か！？』

『おい、落ち着け！』

『ジーク、そんなに暴れると危ないですよ！』

『うるさい！家臣その6！さっさと揺れを収めてこい！』

『ちよっ、押すな うわっ！』

『土君！？きゃっ！』

そうして家から追い出され、気付いたら此処に居たというわけである。

「それにしても土君。今回は服が変わりませんでしたね」

行く先々で服装がコロコロ変わる土だが、今日は何時もの私服である。

「ああ。まあ、当然といえば当然だな」

「え？それはどういう」

『キシヤーツ！』

「「！」「」

ことですか？と言い切る前に、明らかに人間の物ではない声に遮られた。

「今のは……」

「土君！あっちです！」

夏美が声のした方を指し、二人でそこへ向かう。

「あれは一体……」

そこでは、カマキリを擬人化したような怪人と、黒を基調とした赤黄緑の上下3色の戦士が戦っていた。

「あいつは、”仮面ライダー^{オーズ}000”」

「オーズ？」

「ああ。欲望の結晶”コアメダル”を駆使して戦うライダー。3枚のメダルを組み合わせることで、ありとあらゆる状況に対応することが出来る」

士はパラロイドカメラで写真を撮りながら説明口調で話す。

「オーズ……つまり、ここはオーズの世界なんですね？」

「いや、違う」

「?どういうことですか？」

夏美の疑問に、士は出てきた写真を眺めながら答える。

「ここは仮面ライダーの世界。あらゆるライダーの物語が重なり合う場所だ。ほら、見てみる」

「え?……あつ、士君の写真が!」

渡された写真には、今戦っているオーズの姿がピンぼけせずに写っていた。

「ここは俺の世界とも重なっている。だから写真もちゃんと写る」

『トリプル スキャニングチャージ』

『セイヤーツ!』

「おっと、向こうも終わったみたいだ」

再びオーズに視線を戻すと、先ほどのカマキリ怪人 ヤミーを倒していた。

「さて……とりあえず会ってみるか」

「そうですね」

二人はオーズに向かって歩きだそうとした。すると……

「おいお前ら、何をやっている」

金髪に白いシャツ、赤いジャケットを羽織った男に呼び止められた。

「あつ。あの、私達は」

「お前……グリードか」

「!」

士の言葉を聞いた途端、男の目が見開いた。

「グリード？」

「ああ。数枚のコアメダルと無数のセルメダルでできている怪人だ。どうやらオーズとは協力関係にあるようだか……」

そこまで言うと、男は威嚇するような眼で士を睨む。

「貴様……一体何者」

『ぐあっ！』

「「「！」「」」

オーズの声に振り返ると、オーズは先ほどのヤミーとはまた別の、3体のモグラの怪人に襲われていた。

「何やってんだ、映司！」

『アंक！何かこいつら変なんだ！メダルを出さない！』

「なんだと？」

アंकと呼ばれた男と映司　仮面ライダーオーズ　には、見覚えの無い怪人のようだ。しかし士と夏美は、それをよく知っていた。

「あれはイマジン？まだ居たのか」

「士君！」

「ああ」

士はベルトを腰に装着し、ライドブッカーからカードを取り出す。

「変身！」

『k a m e n r i d e r D e c a d e』

カードをベルトに入れると、電子音と共に士は仮面ライダーディケイドへ変身する。

「お前、一体……」

アंकの呟きに答えることもなく、ディケイドはオーズのところへ向かう。

「くそっ、このままじゃあ……」

オーズは、連戦に加え3対1の状況のため苦戦しているようだ。

「うわっ！離せ！」

オーズが2体のモルイマジンに捕まり、3体目が攻撃を仕掛ける。

「うわぁっ！」

そしてそのまま吹き飛ばされ、地面を転がる。

「オオオー」

モルイマジン達は、ジリジリとオーズにとどめを刺すべく近づいていく。その時

『a t t a c k r i d e b l a s t』

電子音が鳴り響くと、銃撃音と共に弾丸がモルイマジン達に当たる。

「!？」

突然の銃撃に、オーズは撃ち手がいるであろう方向へ振り向く。

「危なかったな」

そこには、ピンクと白のボディに十字のラインが入った仮面ライダー、ディケイドが立っていた。

「貴方は一体……」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面、ライダー？」

オーズが立ち上がると、イマジン達も立ち上がり再び戦闘体勢に入る。

「いくぞ」

『attack ride slash』

ライドブッカードが剣の形に変わり、ディケイドはそのままイメージに向かって走り出す。

「はあっ！」

ディケイドが、向かってくるイメージを同時に切りつける。イメージも反撃しようとするが、全てかわされ、もしくはガードされて攻撃が通らない。

「すごい……」

オーズからそんな言葉が漏れた。今まで多くのヤミーと戦ってきたオーズ。しかしディケイドからは、それを上回る程に戦い慣れしているように見えた。

『final attack ride D D Decade』

ディケイドがジャンプすると、イメージとの間に10枚の等身大のカードが並び、そのままイメージに向かってディメンションキックを放つ。

「はあああつ！」

「オオオーッ！」

そしてイマジンの1体に当たり、その場で爆発する。

「オオー」

「オオオー」

それを見た残りの2体は、これ以上は危険だと判断し逃走を謀る。

「あつ！待て！」

オーズは逃げたイマジンを追った。

「あいつら、何処行っただ？」

イマジンを見失ったオーズは、辺りを見回す。

「うわああ！」

すると突然、子どもの悲鳴が聞こえた。

「あつちか！」

オーズは悲鳴の聞こえた方へ走り出す。

「オォー」

そこには、1人の少年とそれに襲い掛かっているイマジン達が居た。

「危ない！」

すると突然少年の身体から裂け目が生まれ、イマジン達はその中へ入っていった。

「え？」

唐突な事態に一瞬思考が停止するオーズ。すると、少年が崩れるようにその場に倒れる。

「あつ！君、大丈夫！？」

少年の身を案じ、すぐさま駆け寄ろうとするオーズ。

『フアアアン！』

その時、汽笛と共に空から電車がオーズの居る方へ走ってきた。

「な、何だ！？」

電車はやがてオーズに沿うように停車し、その中から1人降りてきた。

「君は……」

青と銀のボディに鋭い赤色の目、その名も”仮面ライダーNEW電王”。時の規律を正すライダーである。

少年にパスを翳すと、イメージが飛んだ過去の時間が表れる。

「1971年11月11日か。今から40年前だな」

「こんな子どもが、何故40年前の記憶を？」

変身を解除した”野上幸太郎”と相棒のイメージ”ティ”が少年を介抱しながら話し合う。

「あの……」

そこに変身を解除した火野映司が話し掛ける。幸太郎とティも映司の方へ振り返る。

「君達は、誰？」

「あんた……誰だ？」

「おい、それはこっちの台詞だ！」

鸚鵡返しのように質問をした幸太郎に対し、苛ついたような口調で合流したアंकが返す。

「そいつは仮面ライダーオーズ。ここを守っているライダーだ。それと……お供のグリード、アंक」

すると、声と共に映司達の後ろから士が歩いてきた。

「お前は、さっきの……って誰がお供だ誰が！」

「またあんたか。今度は何の用だ？デイクイド」

「そう言うな。それに、今回は俺が先客だ」

士は以前、電王の世界で迷い込んできたジークを返しに行った際に、一度幸太郎と会っているのである。

「デイクイド？」

「ああ。俺は門矢士 仮面ライダーデイクイドだ」

映司の疑問に対し自己紹介も兼ねて答える士。

「じゃあ、そっちの君は？」

「野上幸太郎、仮面ライダー電王。俺もライダーだ。あんたと同じな」

「電、王……」

突然の状況に唖然とする映司。

「イマジンは俺達が責任をもって始末する」

「後ろの奴も言ってたが、そのイマジンってのは何だ？」

「それは私が説明しよう」

アンクの質問に対し、テディがそれを引き継いで答える。

「イマジンは契約者の記憶を辿って過去へ飛び、自分達の都合の良
いように歴史を変える」

「で、俺達がこのデンライナーに乗って時間を飛んで、イマジンを
始末するってわけ」

テディの説明に幸太郎が補足する。

「それじゃ、俺達はこれで」

そう言つて、幸太郎とテディは電車 デンライナー に乗り込
む。

「おい、映司。俺たちも行くぞ」

「え？ってちよつと待てって！」

アंकも二人に続き、そのさらに後を映司が追う。

「電王の世界の旅は終わったんだが……一応乗ってみるか」

そうして、土もデ_レンライナーに乗り込んだ。

仮面ライダーの世界（後書き）

補足説明

野上幸太郎

仮面ライダー電王”野上良太郎”の孫であり、現在良太郎の代わりにNEW電王としてイマジンと戦っている。良太郎と同じ特異点である。良太郎と違いモモタロス達が憑依して変身しても、イマジン達が武器に変わってしまい憑依も解ける。

テディ

幸太郎と契約しているイマジン。幸太郎に憑依することは無いが、先端に銃口の着いた銃剣に変身し武器として戦う。

一枚のメダル（前書き）

補足説明

仮面ライダーの世界

”仮面ライダーディケイド”の世界観ではライダーの世界はそれぞれが独立している。しかし今回の”レッツゴー仮面ライダー”では、1号、2号……オーズまで全て同じ世界の物語となっているため、『ライダーの物語が重なる世界』Ⅱ『仮面ライダーの世界』とした。（ぶっちゃけこじつけです）

一枚のメダル

デンライナー車内

「はい、コーヒーどうぞ」

「わーい、やったー！」

デンライナーの客室乗務員、ナオミがコーヒーを配っていき、それを紫のイマジン リュウタロス が最初に受けとる。

「ありがとう。……あれ？ナオミちゃん、カップが多くない？」

次に受け取った青いイマジン ウラタロス が、何時もより多いカップを見てナオミに問いかける。

「これはですねえ、あちらのお客さんの分ですよ」

「お客さん？」

そう言うと、ナオミは奥に居る乗客にコーヒーを配りに行った。

「はい、どうぞ」

「あつ、ありがとうございます。」

そのコーヒーを受け取ったのは、先ほど乗り込んだ映司とアंकだ。

「ああん？何なんだお前ら」

その二人を見て、赤いイマジン　モモタロス　が突っ掛かってきた。

「あ、いや、アंकが電王の仕事手伝えって言うから……」

「はあ？アंकだかタンクだか知らねえが、余計なお世話なんだよ！」

「お世話だー」

モモタロスの言葉をリュウタロスが煽る。

「それと……」

モモタロスはそのまま振り返る。

「なんでてめえまで居るんだよ！」

今度は、いつの間にか乗り込んでいた土に突っ掛かる。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「ああん！？やんのかコラァ！」

「ちょっと、落ち着いて！土君も喧嘩を売らないで下さい！」

喧嘩腰の二人を仲裁する夏美。

「落ち着きなよ、先輩。それで……君たちは何で乗ってるの？別に手伝いに来たとかじゃないんでしょう？」

「ああ。そこを開けてみれば解る」

士が指したのは、デンライナーの客車の後方の扉だった。

「？どついう意味だ、そりゃ？」

疑問に思いながらも、モモタロスは扉を開けた。

「なんだこりゃああああ！！」

モモタロスの目の前には、一軒家の客間のような部屋が広がっていた。

「どうやら、デンライナーと光写真館が繋がってしまったみたいなんです」

夏が補足で説明をする。

「ふむ。よく来たな、家臣どもよ」

「あ！手羽野郎！なんでてめえまでいやがる！」

「ああ。そいつ、こっちに紛れ混んでたんだ。引き取ってくれ」

「こつちだって願ひ下げだ！」

「家臣ども、苦しゅうない」

「お前は黙ってるッ！」

「あはは。何か賑やかだな、アंक」

「映司、あの出来損ないのヤミーを黙らせる。さっきから煩くてイライラしてくる」

「誰が出来損ないだ！？誰が！」

「否定するのはヤミーの方でしょう？前半は合ってるし」

「ああ、確かに……ってどういう意味だ、亀！」

モモタロス達が騒いでいると、前の扉からオーナーが現れた。

「乗ってしまったからには、仕方ありませんねえ」

そう言いながら、持っていたステッキでモモタロスとウラタロスの取っ組み合いを止める。

「しかし、過去への介入は絶対に許しません」

今度はアंकと映司を見ながら話す。

「場合によっては、とんでもないことになってしまいます」

「そうなんですか！？」

オーナーの言葉に驚きの声を上げる映司。

「ええ。ですから、絶対にデンライナーからは……降りないで下さい」

オーナーは再び、特にアंकを諭すように、忠告をした。

1971年11月11日

「オォー」

「オオォー」

「見つけた！いくぞ、テディ！」

『ああ』

NEW電王に変身した幸太郎と剣に変身したテディはデンライナーから降り、見つけたイマジンと対峙する。

『幸太郎、タイムは？』

「そつだな……」

そう言いながら、2体のイメージを見る。

「12秒あれば十分だな」

『おもしろい』

「いくぞ！」

『12、11、10……』

デディのカウンtdownと共にNEW電王がイメージンへ向かっていく。

「……………あの、大丈夫だって。俺、ここから動かないから」

映司は今、モモタロス達に囲まれていた。

「あかん」

最初に口を開いたのは、黄色のイメージン キンタロス だ。

「オーナーから絶対に目え離すなって言われてるんや……………ZZZ」

「寝るなバカ！」

キンタロスにツツコミを入れるモモタロス。

「おい」

「お前はともかく、その金髪トサカは信用ならねえ」

「おいつて」

「それを言われると……」

「おいつ！」

「うつせえ！何だ！」

さつきから呼び掛けていた土に、モモタロスが返事をする。

「アंकならもう居ないぞ」

「何言つてんだ。此処にしっかり……ん？トサカが黒いぞ？」

「！アंकが居ない！何処行つた！？」

アंकは現在右腕しか復活して居ない為、人間の肉体を借りていた。よってアंकは腕だけでも動けるのだ。

「それならほら、そこだ」

土が窓の外を指すと、そこには脱走したアंकがいた。

「あーっ！連れ戻さないと！」

「よし、行つてこい！」

モモタロスにそう言われるや否や、映司はアंकを捕まえに外へ飛び出す。

「あれ？目を離しちゃ不味いんじゃないの？」

「あーっ！しまった！いくぞお前ら！」

そのあとをモモタロス達が追う。

「土君、私達も……」

「ほつとけほつとけ。あいつらだけで十分だ」

土は完全に傍観の姿勢のようだ。

しかし、この出来事が後の大事件を生むとはこの時誰も想像すらしなかった。

「はああああ！」

NEW電王が走りながらイメージを切り裂き、イメージはそのまま爆発する。

「ふう……ん？1体足りないぞ」

一方映司は……

「見つけたぞアंक！外に出たら駄目ってオーナーに言われただろ！」

メダルを持って宙に浮いているアंकを掴みながら、文句を言う映司。

『うるさい！この時代なら、まだ他のグリードは目覚めてない。メダルは取り放題だ！』

「やっぱり、そんなことだろうと思った！さあ帰るぞ！」

逃れようとするアंकとそれを止める映司で綱引きの状態になっていた。

「オォー」

「うわっ！」

そこへ、NEW電王から逃げてきたイマジンとぶつかり盛大に転ぶ二人。

「見つけた！はああああ！」

追ってきたNEW電王が、イマジンを一刀両断する。

「オオーッ！」

そしてそのままイマジンが爆発する。

「うわああッ！」

二人は爆風で吹き飛ばされ、アंकの上に映司が落下し、思わずメダルを離す。

『映司！邪魔だ、どけ！』

「お前ら、いたぞ！」

すると向こうからモモタロス達が追いかけてきた。

『不味い！』

「僕に釣られてみる？そらっ！」

逃げようとするアंकを、ウラタロスが網で捕まえる。

『離せ！』

「もう逃げられないよ」

「大人しくしろ！」

そうして退散していく一行。

「……イーツ？」

その場に一枚のメダルを残して……

一枚のメダル（後書き）

作中でアंकがヤミーを作ろうとしている場面で、「まだこの頃のアंकってヤミー作れないんじゃないの？」と思われるかもしれませんが、原作でもやっていたのでそのままにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6860y/>

10《ディケイド》×40《オールライダー》 仮面ライダーの世界

2011年11月27日15時56分発行